



どれほど長い夜でも、明けない夜はない。

室内いつぱいに満たされた朝日と共に、新しい一日を告げる小鳥たちの囀りが聞こえてくる。

痛みを感じるほど眩しい日差しは、閉じていている瞼を容赦なく攻撃してくる。

瞬きを繰り返しながら重い瞼を押し上げれば、ぼんやりした視界は、徐々に見慣れた天井をかたどっていく。

泥のように重い思考が徐々に浮上していく中、脳裏に浮かんだ言葉はただ一つ。

『まだ、生きている…』

半ば客観的な感想は善悪もなく、ただ事実を再確認しただけにすぎない。

本来ならば喜ぶべきだが、悪運だけで生き延びている気がするハンジは、今日も鬱懐が塗り重なった。

ずっしりと重い頭は鈍痛がまとわりつき、急激に動かせば首から転げ落ちそうだった。

次第に覚醒していく身体は、痛みを訴えるのは頭だけな

く、顔や腕や足、体の節々と、連鎖するように大小の痛みが、全身を覆っていた。

酷く重い頭を片手で支えながら起き上ろうとした時、僅かに力を込めただけでも、体中の痛みが増す。

「痛っ…」

痛む体を宥めながら、恐々と身を起こしている中、負傷自体が久々で、少し新鮮な気分だった。

上半身を起しただけで一苦労に思えたが、一息ついてみれば、思い通りに動く手足に、重症でない事を認識する。

安堵の吐息を漏らした時、不意に視界の端を掠める物体に、思考が追い付けず、数秒ほど固まった。

しかし、次の瞬間、反動的に顔を振り向けた途端、凄まじい激痛が、脳内を駆け巡っていく。

「いつつてええ…っ！」

痛みのみならず、目頭が熱くなるのを余所に、今度は視線だけを上げれば、先ほど目にした物が、見間違いでない事が証明された。

ベッドの脇には、リヴァイが椅子に座っている。

しかし、先ほどから身動き一つしないのは、眠っているからだ。

両腕両足を組んだまま眠る姿は器用だが、とても不安定で、軽く押すだけで椅子から転げ落ちそうだ。

無防備すぎる姿はいつもの威圧感もなく、好奇心がくすぐられるが、それ以上に、付き添っていたことの方が意外だった。

足の怪我で前線を外されても、怒涛の数日だったのは同じで、おとついには、ろくに仮眠すらとっていないのを知っている。

だからこそ、昨夜はゆつくりベッドで休みたかったはずなのに、こんな状況下にさせてしまった事が悔やまれる。

しかし、後悔に苛まれる反面、隠しきれない嬉しさが、頬を緩ませていく。

付き添いも必要ない怪我なのに、椅子で眠り込んでいるリヴァイを眺めていると、愛おしさが込み上げてくる。

静かに持ち上げた指先で、目元にかかっている前髪を整えたハンジは、満足気に微笑んだ。

そして、そのまま手を引こうとした瞬間、勢いよく伸びてきた手に掴まれてしまった。

無意識のまま掴んだ手首を振じるリヴァイに、激痛が走ったハンジは、引っ込んでいた涙が零れ落ちていく。

「痛いっってー！痛いっ！痛いっ！痛いっ！痛いっ！痛いっ！」

絶叫に近い悶絶に、瞬く間に力が緩まったが、自力で引き抜くまでには至らない。

まだ寝ぼけ眼のリヴァイは、状況確認するように掴んでいられる腕を辿りハンジを目にしてから、素っ気なく手を離れた。

寝ていた事が落ち度だと思っているリヴァイは、欠伸を噛み殺しながら、早く目を覚まそうと奮闘し始めた。

それは、派手な物音で飛び起きた小動物のようで笑いを誘う。

一見には和やかに見える風景だが、それに浸っていられる余裕がない事も理解している。

痛む腕をさすりつつも、通常営業に戻ったりリヴァイから、どんな報告を聞かされるのか、肝が冷えるばかりだった。

アニの捕獲完了よりも、少し早い時間、壁内に巨人が現れ、そのまま混沌の夜に雪崩れ込んだ。

ようやく乗り切れたと思えた刹那、ライナーとベルトルトに、エレンとユミルを連れ去られたのは、昨日の事だった。

壁の穴の修復の為に居合わせたおかげで、攻防には参戦出来たが、巨人同士の戦いは壮絶で、人間など軽く吹っ

飛ばされた。

駆けつけたエルヴィンに、事後報告をした所までは記憶にあるが、次に目を覚ました時には、すでに兵団本部に運ばれた後だった。

打撲と擦り傷だけですんだのは、まさしく悪運だと思えた。

急速に修復しようとする熱と、激痛で朦朧としたまま、エレン奪還と、エルヴィン負傷と帰還の報告を同時に耳にした辺りで、再び意識が途絶えている。

あの時、まだ治療室にいた自分を、自室に運んだのは、おそらくリヴァイだろう。

黙考している間に、ようやく目が覚めてきたリヴァイは、軽く頭を振ってから、改めてハンジに視線を向けていく。

「起きたなら、さっさと起こせ」

時間がもつたいないと責任転嫁され、軽く肩を竦めたハンジは、起こすのは勿体なく思っていたが、それを、そのまま口にする気もない。

「いや、その前に、ちゃんとベッドで寝なよ」

付き添いは不要だと言語に込めるハンジを、鼻先で笑い飛ばしたリヴァイは、可愛げのない恋人に口元を歪めた。

それでも、憎まれ口を叩けるほど軽症だと、再認識出来

たりヴァイは、ようやく心から安堵する事が叶った。

頭痛だらけの現状は、指揮者不在のまま停滞している。しかし、それを報告した途端、怪我も厭わずに、飛び出していきそうなバカが目の前にいる。

本音を言えば、傷が完治するまで大人しくして欲しいが、それを許さない現状に苦悶させられる。

それでも、どれだけ暴れようとも、今日一日だけでも、ベッドにくくりつけておきたい。

それ故に、付き添いと云うよりも監視に近い事を、ハンジはまだ気づいていない。

それでも、現状を嘯くことまでは叶わないのは、真摯な眼差しを見れば分かる。

どうするべきかを悩んでいるリヴァイを余所に、業を煮やしたハンジからは、清々しいほど潔い声が聞こえてくる。

「あれから、どうなったの?」

余計な詮索が性に合わないリヴァイ以上に、どれだけ周りが抑え込もうとしても、それを根こそぎ薙ぎ倒していくハンジに、満足を隠し事など出来た試しもない。

だからこそ、苦々しいため息を大きく吐き出したリヴァイは、重かった口を押し上げていく。

「良い話と、悪い話があるが：どっちから聞きたいんだ?」

「どつちからでも」

祈るように両手を組んだまま、向けらえた強固たる目は、覚悟が出来ている事を物語るには十分だった。

「じゃあ、良い方から聞いとけ」

何気なく良い方を選択したのは、単純に比較するのもおこがましいほど少ないからだ。それでも、ゼロよりはマシだと思える。

焼きつく視線に射貫かれながらも、リヴァイが口にしたのは、エルヴィンの容体が安定しつつある詳細と、エレンの奪回や、ニック司祭の拘束やウオール・シーナの壁の修繕状況など、事後報告が主だった。

「そう、右腕を……」

小さく呟いて押し黙ったハンジは、利き腕を失ったエルヴィンを慮るものの、命があっただけ良かったのかもしれない。トツプを喪失した群れは、崩壊するのも容易い。

懸念や悲観を一息で薙ぎ払い、再び目に力を宿したハンジは、俯きかけていた顔をリヴァイに戻した時には、もう分隊長の顔に戻っていた。

「さて次は、悪い方の話を聞こうか」

こちらの方が膨大だと、分かり切っているからこそ、覚悟を新たにハンジに、僅かに目を逸らしたリヴァイは、

苦虫を潰したような顔で告げていく。

「ミケとナナバの隊は、全滅だった」

感傷に耽る間もなく、その他にも、憲兵団を含んだ多くの犠牲や負傷者が溢れている事。壁の穴の有無は、何度目かの確認作業に移っている話など。

淡々と続けられる報告は、感情の変動も少なく、抵抗なく耳に入ってくる。

大小それぞれの報告を聞き終えてから、無意識の内に口から零れ落ちた言葉は、自分でも意外なほど、落ち着いた声色だった。

「ナナバの部屋は、私が片付けるね：そういう約束だったから……」

感情の起伏のない言動は、極々事務的だったが、実感が伴わないせいで、悲嘆するところまでは、到達していない。ただ、胸に抱えていた重荷を下ろしただけにみえるハンジに、リヴァイも余計な茶々を入れる気もなかった。

「……分かった」

そして、犠牲になった仲間も大事だが、これから先の事の方が、もっと重要になってくる。

だからこそ、リヴァイも余計な手が入らない間に告げる必要があった。

「それと、俺の隊だが、104期のヤツらで補充する」

「エレンだけじゃなく、全員？大丈夫なの？」

正直、どれだけリヴァイが最強でも、新人だらけの隊は不安要素が大きすぎる。

せめて、副官くらいベテランを付けたいが、誰が生存しているかも、脳内では整理が追いついておらず、咄嗟には適任者が出てこない。

頭を悩ませるハンジを余所に、それを嘲笑うように口角を上げたリヴァイは、何でもない事のように言い放った。

「下手に連携が取れないよりマシだ、それに、その方が今後も動きやすい」

お子様たちの子守りを押し付けた気分で、申し訳なくなるハンジは、苦い心情を噛み殺すと力なく笑った。

「そう…かもね」

考えなければならぬ事や、しなければならぬ事が沢山待ち受けているのに、まだ痛みが残る身体が忌々しくなる。

しかし、それに屈する気もなく、痛む身体を無視してベッドから降りようと身を起すハンジを、片手で制したのはリヴァイだった。

「お前は、今日は休息だ」

「そんな、無理だよーエルヴィンがいつ目を覚ましてもいいように、死亡者リストとか、遺族へ方の報告も早い方がいいし、隊の再編成もしなきゃだし、それに壁の修繕だつて…」

矢継ぎ早に湧いて出てくる言葉を遮るように、数本の指だけで額を押し戻してくるリヴァイは、容赦なく言い放った。

「今日一日くらい、大人しくしている」

「このくらいの怪我なら、もう大丈夫だって、だからっ！」

チリチリと痛む心身に耐えながら、押し返してくるハンジに、呆れ顔に変わったリヴァイは、押ししていた力を一気に手放した。

加わる力がなくなり、大きくバランスを崩したハンジは、重力に従いリヴァイの方へ倒れ込んでくる。

それを、待ち構えていたように、強く抱き止めたリヴァイは、片手だけで、手早くブーツを脱ぎ始めた。

「俺は、もう一度寝る。付き合え」

予想もしていなかった一言と共に、ベッドに潜り込んでくるリヴァイに、驚嘆したハンジは、ますます反論が早まっていく。

「はあ？ちよつ、え、コ」で？いやいや、自分の部屋で寝な

つて！その方がキレイだし、てか、私は起きるし、それなら交代で十分だと思っただよね？」

動き難い身体で足掻くハンジを余所に、何年も培われた所作は洗練されており、簡単には拘束を解けない。

それどこか、押し問答をしている内に、リヴァイが寝るには十分な空間が、ベッドの中に出来ていた。

不甲斐なさと諦めが交差する中、大仰に天を振り仰ぐハンジが、鈍い痛みが走る頭を抱えた瞬間、静かに押し倒されていく感覚が全身を襲う。

重力に従うように、ゆつくりと柔らかく背中がベッドに到達した時、少しだけ目を和らげたリヴァイは、覆いかぶさるように抱き締めてくる。

「文句は起きたら聞く、今は寝かせろ」  
彼にとつては気遣いの一種には違いないが、拘束代わりのように抱え込まれるのは、釈然としない。

それでも、傷に障らないような力加減は、本気で逃げようと思えば、簡単に解けそうだった。

そして、よほど眠たかったのか、瞬く間に寝息を立て始めたりヴァイに、自然と身体の力が抜け落ちたハンジは、徐々に反骨精神も萎えていく。

安心しきったように、意識を手放す恋人を、のんびり眺

めていたハンジは、頬に残る涙の痕に気付いてしまった。

自分の目敏さに失笑しつつも、痕を辿るように指先を添わせる内、胸の内が震えてしまう。

出来るだけ感情を切り離して聞いていたつもりでも、昨夜の情景を想像しただけでも、身が凍りつきそうさ。

リヴァイが寝不足なのは、一晩中、孤独と戦っていたからだ。

精鋭に育て上げた部下を、一斉に亡くしたばかりのリヴァイが、今度は、エルヴィンの重症に加え、ニケもナナバもこの世を去ってしまった。

軽症とは云え、呑気に眠り込んでいた自分は、さぞかし腹立たしかっただろうと思えたハンジは、一日くらいなら罪滅ぼし代わりに、大人しくしていられる。

縫りつくように伸ばされた腕を宥めるように、少しだけ移動させると、慈しむように涙の痕に唇を落とした。

少しだけ浮かした身体を元に戻そうとした時、紙が擦れるような音が耳元を掠めていく。

何気なく音がした方へ目を向けたハンジは、リヴァイの胸ポケットからはみ出ている紙を見つけると、起こさないように静かに引き抜いた。

几帳面なりヴァイらしく、綺麗に畳まれた紙を広げると、

そこには、大まかな死亡者リストが書き殴られていた。分かる範囲内でメモられたリストだったが、名を辿れば辿るほど、仲良かった者や見知った顔ぶれが、沢山欠けている事に気付いき、自然と涙が頬を伝っていく。静かに伝っていく涙を乱雑に拭ったハンジは、感情を切り離すようにベッドの脇にリストを落とすと、強く瞼を閉ざした。